

様 式 C - 1 9、F - 1 9 - 1、Z - 1 9 （共通）

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：27101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13256

研究課題名（和文）「子どもの居場所」を支える支援者の専門性に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Expertise of Supporters who Coordinate "I-basho for Children"

研究代表者

山下 智也 (Yamashita, Tomonari)

北九州市立大学・文学部・准教授

研究者番号：50601697

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000 円

研究成果の概要（和文）：子どもを取り巻く環境の変化に伴い、「子どもの居場所」の必要性が注目される中、先進的な現場へのフィールドワーク及び支援者へのインタビューを通して、多様な子どもに開かれた居場所の支援者の専門性の一側面に迫ってきた。支援者は、場への入りやすさや居やすさを生み出す環境構成を行うとともに、子どもがこの場にやってくる文脈を重視しながら関わりの度合いを調整していた。それらを実現させるためには、場の状況の変化を察知する力や、公平性・対等性をもって場をコーディネートする力が必要不可欠である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

先駆的な居場所実践を元に導いた本研究の知見は、現代に見合った居場所論をボトムアップ的に再構築する際の一助となるとともに、多様な子どもの居場所実践において応用可能であると考えられる。特に、子どもの貧困支援から多世代の居場所としての地域コミュニティづくりへと役割が拡大してきている子ども食堂にも大いに役立てられるのではないだろうか。また、これらの知見をまとめたリーフレット「子どもの居場所×スタッフの居方」を、子どもの居場所に関する講演会や研修会等で配布することで、実践者及び実践現場に還元することに努めている。

研究成果の概要（英文）：The need for "I-basho for children" is drawing attention as the environment surrounding children changes. This research approached the expertise of the supporter of "I-basho for children" who don't limit the target, through fieldwork to the pioneering "I-basho" and interview with the supporters. As a result, the supporters continued to adjust the environmental composition that made it easy to enter and stay in the place and the degree of involvement with children, focusing on the context in which children came to this place. To that end, it is essential for supporters to have the ability to detect changes in the situation on the place and to coordinate the place with fairness and equality.

研究分野：環境心理学

キーワード：居場所

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

「子どもの居場所」という言葉は近年、市民権を獲得してきた。そのルーツを辿ると、1980年代の不登校・非行問題に端を発する。それらの問題の背景として、学校での“居場所のなさ”が指摘され、『心の居場所』づくり(文部省, 1992)が目指されたのである。それを受け、児童館や公民館を活用した居場所や、フリースクールやフリースペースの開設等、学校外での居場所づくりが展開された。しかし2000年代には「居場所」の概念が広がりを見せ(住田・南, 2003)、文部科学省の「地域子ども教室推進事業」がその流れに拍車をかけた。学校や公民館等を活用し、緊急かつ計画的に子どもの居場所を3年間で全国に1万か所も創設したのである。いつしか「居場所」は、「居場所のない子ども」に限らず、『全ての子ども』に必要なものとしての『居場所』を指す概念へと変容していった(山下, 2013)。

従来の居場所研究は、学校に「居場所のない子ども」に必要な居場所の構成要素として、受容感や自己肯定感、所属意識等の内的メカニズムの解明に力が注がれてきた(杉本・庄司, 2006)。しかしながら、それらの研究成果を基にした「居場所」論が体系化される前に、居場所の概念が“パラダイム転換”を起こしたことで状況が一変する。全ての子どもに対応するということは、多様な背景やニーズを抱えた子どもそれぞれに応えるということでもあり、従来とは違った多様な役割が支援者側に問われざるを得ない。もちろんこれまでも子どもと支援者の関係性に迫る研究も見受けられるが、このパラダイム転換を含みこんだものであると言い難い。つまり、不特定多数へと広がりを見せた「子どもの内的メカニズムの解明」よりも、子どもが入れ替わっても居続ける「支援者の専門性」へと議論をシフトチェンジしていく必要があると考える。

## 2. 研究の目的

実践現場の現状を見渡すと、“パラダイム転換”に対応できずに混乱している現場も少なくない。とりわけ、行政主導で「居場所」が急速かつ大量に作られ、その場を担う人材は誰が入れ替わっても成り立つシステムが目指されてきたことで、支援者の専門性は蓄積されない現状にある。ここで、田中(2010)が提示した居場所における「主(あるじ)」の概念が、本研究のブレックスルーになると考える。「主」は、自身の居場所観をその場に反映しながら、その場に集う人々と程よい距離感で関係性を紡ぎ、居場所をうまく切り盛りしているのである。また、その「主」抜きにはその場を語れないほどの重要な存在でもある。そこで本研究では、大量生産されている現場の現状とは対極にある「主」に着目したい。“パラダイム転換”を乗り越えて今も多様な子どもの居場所となり続けている場の「主」の“居場所観”に、支援者の専門性を見出す重要な手がかりがあると考え。従って本研究は、居場所支援者としての「主」の“居場所観”に迫り、現代の「居場所を支える支援者の専門性」の一側面を明らかにすることを目的とする。

## 3. 研究の方法

「居場所を支える支援者の専門性」を解明するためには、多様な子どもに開かれた(=対象を限定していない)居場所として、一定の成果を得ている先進事例へのアプローチが最も効果的であると考えた。また、支援者の居場所観及び専門性について、支援者へのインタビュー調査によって迫るとともに、それらが色濃く現場に反映されていると考えことから、現場でのフィールドワークについても重点的に行うこととした。当初は最大4か所を候補地として想定していたが(進捗状況次第で候補地を絞ることは前提に)、研究を進めていく中で、やはりその現場を理解するには対象地を絞って深く迫ることの必要性を感じるとともに、研究者自身の異動等も重なったことで、本研究においては、「子どもの遊び場『きんしゃいきゃんぱす』」をメインの研究対象として集中的にフィールドワークを行うよう軌道修正したとともに、比較対象として「地域をつなぐ! 交流の場づくりプロジェクト『芝の家』」を研究対象として選択し、フィールドワークを行った。具体的には、「きんしゃいきゃんぱす」には、初年度は月1回程度、最終年度には週1~2回程度、芝の家には最終年度に連続2日間ほど、フィールドワークを行った。特に、環境心理学・環境行動学的視点から場の特性を整理・分析するとともに、参加観察を通してエピソード記述を行うことで、支援者と子どもの関係性を分析した。さらに、「主」である支援者を対象に、「居場所概念変遷の実感」、「支援者の役割」、「居場所へのこだわり」等について半構造化面接によるインタビュー調査(2時間程度)を行った。

## 4. 研究成果

フィールドワーク及び参加観察等で得られた「場の特性」や「関わりのエピソード」、「支援者へのインタビューデータ」を元に、支援者の居場所観及び専門性に関連するトピックを抽出し、KJ法を援用して分析した結果、下記の知見が得られた。

### (1) 環境構成を通してのアプローチ

入りやすい環境構成: 「居場所に来る」以外のアクセスの仕方の担保と(駄菓子を買うなどの別の目的が用意されている、通り過ぎることもできる等)入ってくる際の視線への配慮(道に張り出していることで遠くから様子が見える、入ったときに緩衝材があることで視線がぶつからない等)が、この場への入りやすさを生んでいた。

空間にグラデーションを生む環境構成: 各自の目的や場への関わり具合により、自分が居る空間を選択できる(応接間の空間 リビング的空間 茶の間の空間、シャッターや縁側を開放す

ると空間が広がる等)。状況に応じて主も居る位置を変えていた。  
導線・視線を考慮した環境構成：子どもの導線を考えて椅子やバンコ(縁台)を配置するとともに、主自身も、場全体へ視線を配ることができ、実際に行くこともできる居方をしていた。

## (2)来場者への関わり

初めて来た人への関わり：相手の様子を伺いながらも意識的に関わっていた(初めて来た人や慣れてない人、一人で来た人は気にかかる、少し様子を探った上で名前を聞く等)。

来場者への具体的な関わり：来場者同士の間に入って紹介をした上でタイミングを見てその場を離れたりと、異年齢での関わりの際に必要なに応じてそのギャップをフォローしたりと、人同士を繋ぐためのきっかけとなっていた。また、遊びが盛り上がり過ぎたときに、敢えてその場に参加することで、場を崩さずに雰囲気を整えたり、攻撃的で一方的な暴言を抑制したり、さらには来場者の不安な気持ちを受け止めたりと、状況に応じて関わり、場を落ち着かせていた。さらに、あくまで来場者が主体であり、こちらは全ての責任を負わないという距離感でいた(子ども同士のけんかには必要以上に介入せず、程よい距離を取る等)。

来場者の文脈の重視：主としてそれぞれの文脈を重視し、必要に応じて互いの文脈を顕在化させることで、アウェイ感を払拭するとともに、この場に居やすい雰囲気を生み出していた(誰々に会いたい、遊びたい等の来場者それぞれの「つもり」を重視する、来場者それぞれがどういう「経緯」で来ているのかを解説する等)。

## (3)主としてのスタンス

場を守る役割を果たす：場を守ることに敏感で、ときに防波堤となる(不審者と目を合わせず、入ってくる・話しかけるきっかけを与えない、ガードマンとしての役割を果たす等)。

自分自身が無理をせず楽しむ：主もしたいことをして過ごしたり、他の大人と関わることを楽しんだり、人と人を繋ぐ役割を面白がったりと、主自身が無理をせず居場所観を持ち続けられるように過ごす。

支援者というよりも一人の人間として関わる：「活動自体は支援だが、自分は支援者ではない(あくまで配慮レベル)」「良くも悪くも専門職ではない(サポートしたいときは動くこともあるが)」というインタビュー回答に代表されるように、主は敢えて、支援者的な居方をするのではなく、非専門職として、一人の人として居ることで、場をコーディネートしている。また、接客をせず、対等に関わるとともに、メンバーの固定化を防ぎ、公平性を重視して関わる。

このように、主は現場の中で、初めて来た人への配慮はもちろんのこと、来場者の「つもり」や「経緯」等の各々の文脈を重視しつつ、人同士を繋いだり場を落ち着かせたりといった直接的な関わりを状況に合わせて行っている様子が見受けられた。また、入りやすさや居やすさを生み出すような環境構成や、それを生かすための居方をするなど、間接的な関わりも行っていた。さらには、主として場を守りつつも、主自身が居場所感をもってその場を楽しみ、支援者というよりも一人の人間として、公平性・対等性を担保するかたちで場をコーディネートし続けていた様子が浮かび上がってきた。中でも、居場所の主として、「それぞれの文脈を読み取ること」は、居場所概念がパラダイム転換している現代においては非常に重要な専門性だと言えるのではないだろうか。また、上述の居方・関わり方を状況に応じて選択できるよう、「場の状況の変化を的確に察知していること」も見逃せない。そして、両者から「支援の前に、共に生きること」の意義が語られたことも非常に興味深かった。まずは一人の人として子どもたちと関係性を切り結び、その先に、必要に応じて支援があるという構造だと言えるだろう。

いまだに体系化されていない子どもの居場所研究において、先駆的な実践現場に即してボトムアップ的に導き出した本研究の成果は、今後の新たな子どもの居場所論を構築していく足掛かりとなると考える。とはいえ、あくまで2事例を取り扱ったにすぎず、ここで得られた知見そのものも、一般化可能性が十分に担保されているとはいえない。その課題を乗り越えるには、他の実践現場に本研究の知見が適用可能かどうかを検証していくことが重要であろう。そのためにも、本研究の知見を掲載した一般向けのリーフレットを地道に現場へと還元し、その検証の一助としたい。また、本研究では、子どもの居場所における支援者の専門性の一側面を描いたに過ぎない。今後は、要素として見出された支援者の関わり方・居方を繋ぎ合わせながら、支援者としての専門性を立体化させたいと考える。

## <引用文献>

文部省、登校拒否(不登校)問題について 児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して(学校不適応対策調査研究者会議報告) 教育委員会会報(44)、1992

住田正樹・南博文(編) 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在、九州大学出版会、2003  
山下智也、地域における子どもの居場所の意味 子ども遊び場『きんしゃいきやんぱす』での実践的研究による一考察、日本生活体験学習学会誌、第13号、2013、51-63

杉本希映・庄司一子、「居場所」の心理的機能の構造とその発達的变化、教育心理学研究、54、2006、289-299

田中康裕、まちの居場所を読み解くキーワード 場所の主(あるじ)、日本建築学会(編)、「まちの居場所～まちの居場所をみつめる/つくる～」、東洋書店、2010

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1 . 発表者名 山下智也
2 . 発表標題 子どもの居場所において私たちは何をデザインするのか “居場所形成過程”を支える環境に着目して
3 . 学会等名 人間・環境学会
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 山下智也
2 . 発表標題 生活体験が子どもの育ちにもたらす意義 環境心理学の視点から
3 . 学会等名 日本生活体験学習学会
4 . 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6 . 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----